

芸術教育文献解題 4

山 口 喜 雄
石 野 健 二
茅 野 理 子
中島宗皓(望)
田 和 真紀子
株 田 昌 彦
山 田 有希子
本 田 悟 郎

宇都宮大学教育学部紀要

第65号 第1部 別刷

平成27年(2015) 3月

Bibliographical Notes 4 of the Literature about the Education through Art

YAMAGUCHI Nobuo, ISHINO Kenji, CHINO Masako, NAKAJIMA Nozomu
TAWA Makiko, KABUTA Masahiko, YAMADA Yukiko, HONDA Goro

芸術教育文献解題 4

Bibliographical Notes 4 of the Literature about the Education through Art

山口 喜雄, 石野 健二, 茅野 理子, 中島 宗皓 (望),
田和真紀子, 株田 昌彦, 山田有希子, 本田 悟郎
YAMAGUCHI Nobuo, ISHINO Kenji, CHINO Masako, NAKAJIMA Nozomu
TAWA Makiko, KABUTA Masahiko, YAMADA Yukiko, HONDA Goro

1. はじめに：“Independence”で揺れる現代世界と芸術教育

芸術教育文献解題の共同執筆は全4回の最終回で、今回は起承転結の「結」である。

筆者は2009～2014年の6年間に、訪問順で米・伊・パチカン・仏・スペイン・英・蘭・ベルギー・韓・メキシコ・フィンランド・スウェーデン・露・中・仏領タヒチ・ギリシャ・トルコ・豪・ポルトガル・モロッコなど20ヶ国・地域における多数の美術館・博物館や諸学校を巡り、数々の面談調査を行ってきた^[註1]。日本および日本が承認した世界の国の合計は195で、2014年現在193ヶ国が国際連合（United Nations）に加盟している^[註2]。つまり、世界の10%の国・地域で歴史的建造物や美術作品と間近に接し、多数の美術館・学校教育等関係者と面談するという貴重な体験を得た。

ところで、20世紀以降の世界は“Independence”という波が連綿と続いた。20世紀初頭から1945年の第二次大戦終結以前に独立した国は9、大戦後で20世紀末までの独立は88、21世紀以降は4で、合計101ヶ国を数える^[註3]。実に、国際連合において52.3%が新独立国である。

2014年8～9月「英国からのスコットランド独立住民投票」が世界の注目を集め、またしても世界は“Independence”で揺れた。開票結果は、独立に反対55.25%、賛成44.65%で、投票率は国政選挙の過去最高を上回る84.6%であった^[註4]。投票日直前、英国から「独立せずとも今後自治権を拡大へ」との見出しで、キャメロン首相らが税制や福祉政策の一部の権限をスコットランド議会に移譲の約束したと報じられた^[註5]。同様に、スペイン北東部にあるカタルーニャ自治州の州都バルセロナでは、欧州債務危機を契機に中央政府からの独立を求める市民らが「カタルーニャも独立住民投票を」をスローガンに、地元推計で約180万人がデモを行ったという^[註6]。

“Independence”は国家の問題である。それを人間の発達過程に準えるなら意思・決心・判断などの意の“decision”という語が適切であろうか。それらに関連した英国連邦の3氏と出会った。2010年9月23日にロンドンのローハンブトン大学でロバート・ワッツ^[註7]教授による美術教育の講義や表現実習を参観した。一人の乳幼児が絵筆をもって絵筆で楽しそうに自在に描く動画を約30名の学生に見せて“decisions”と白板に記し、造形活動を通して乳幼児期から子どもの意思を大切にすることの重要性を強調していた。

2013年6月3日、英国のリーズ大学附属ブラザートン図書館^[註8]を訪れ、『芸術による教育』の著者H・リード卿^[註9]令息のベン・リード、元リーズ大学美術史上級講師^[註10]への面談調査を行った。ベン氏は、「父はやさしい（gentle）性格で、しっかりした考えをもった人であった。しかし、自分の考えや、子どもたちの将来への期待などを押し付けることはしなかった。子どもの個性

が自然に伸びるような態度だった」と語った。H・リードは著作内容と家庭での子育てが“decision”重視という姿勢で一貫していた。

2014年7月10日、豪州のメルボルンにあるビクトリア州立美術館^[註11]にて、同美術館教育課のジーナ・パネビアンコ課長^[註12]への面談調査を行った。「幼児から学生による美術館での学習は美術作品の分析・理解だけにとどまらない。連想力や関係性の認識を高め、冒険的・批判的で新たな見方の獲得、求められるアイデアに応える能力、哲学をも形成することができる」と語った。広義での芸術学習活動は、より豊かな自分らしい“decisions”を形成し、確固とした“a spirit of independence”を身につけ、難題山積の21世紀創造の支えとなるであろう。この『芸術教育文献解題4』が、芸術学習活動に少しでも寄与できたらと祈念している。(山口喜雄)

2. 芸術教育文献解題

2-1 解題『教育美術2014年2月号(通巻860号)』



『教育美術』は1935(昭和10)年創刊、東京都台東区所在の公益財団法人教育美術振興会が1万3000部発行する日本で唯一の美術教育月刊誌である。幼稚園・保育所、小・中学校の子どもの絵を対象にした「全国教育美術展」、美術教育の実践研究を表彰する「教育美術・佐武賞」を主催し、最新の美術教育実践や美術教育制度等の記事を毎月掲載している。

通巻860号は全84頁で定価2000円、「第73回全国教育美術展カラー作品集」と題する特集号である。1922(大正11)年に「教室の学習から生まれた子どもの創造的な作品」による全国図画展として出発し、90余年を経た2014年2月に第73回を迎えた。日本全国の小学校21460校中(2012年文科省統計)の12.3%2647校から12万0805点の応募があり、全国学校賞12点、地区学校賞206点、特撰・入選・佳作など個人賞約4万点を設けて表彰している。それらから計55頁に109点のカラー作品、作者と指導者の短文が掲載され、子どもたちによる日本美術文化の現在を感じ取ることができる。また、全国学校賞受賞校紹介の計4頁に12作品と校長・教諭らの言葉、岡田京子教科調査官「子どもは自分で表したいことを見付けられる」や東良雅人教科調査官「子どもたちの『今だから』を大切にしたい」など18名の〈全国審査員からひとこと〉、特選者名簿等々の記事から現代美術教育の到達点と課題を具体的に興味深く読み解くことができる。(山口喜雄)

2-2 解題『美育文化ポケット2014年Spring号(創刊号)』

季刊『美育文化ポケット』は、「保育・授業実践、造形カリキュラム、幼稚園・保育園訪問などの記事を満載」し、「きょうの保育と授業にすぐ役立つ実践のヒントとこれからの造形・美術教育を展望する情報」提供を目的とする「幼児と小学校低学年を中心とした造形・美術教育雑誌」である。前身は1950(昭和25)年に、日本の美術教育振興と関係教員への情報提供を目的として設立された美育文化協会の機関誌・月刊美術教育誌『美育文化』である。50年の歴史を刻み最終号となっ



『美育文化ポケット 2014年Spring号（創刊号）』

編集委員長：藤澤英昭

発行所名：公益財団法人美育
文化協会

出版年：2014年

た2014年3月号の特集は「第44回世界児童画展」で国内の部は応募数1998団体で9万4721点、海外の部の応募国数は38ヶ国・地域で6万0206点、計66点の総理大臣賞・外務大臣賞など特別賞や特選・金銀銅賞等1万余点を表彰した。

さて、全カラー34頁『美育文化ポケット』創刊号は定価450円で、学生にも購入しやすい。レイアウトも一新し、大橋功「はじめの一步」、藤子・F・不二雄

ミュージアムの伊藤善章館長「ドラえものの『ポケット』」、秋田喜代美×大橋功×槇英子「『アートで育つ、こどもが育つ』ためのポケットその1」など、前身の掲載内容や編集方針を大きく変容させた意義や誌名のコンセプトを提示している。西村徳行「『やまびこ』になって!」、奥村高明「こどもの絵を聴く【小学生の部】」、水島尚喜「連載ポケットキーワード第1回『子ども』」等々、3ヶ月後の次号が楽しみな記事が並立している。（山口喜雄）

2-3 解題『音楽と人間と宇宙』



『音楽と人間と宇宙』

著者名：エレナ・マネス

監修：柏野 牧夫

訳者名：佐々木千恵

出版社：ヤマハミュージック
メディア

出版年：2012年

様々なメディアを通じて我々の周りには音楽が溢れている。音楽の将来は安泰であるかのようであるが、実は飽和状態とも言えるものであって、音楽の無力化が心配されるところである。こういった中で音楽と人間の関係において、どのような相互のあり方が必要なかということを考えなければならないだろう。ドキュメンタリー監督エレナ・マネスによる本著は、なぜ音楽は感情を強く揺さぶ

るのか、音楽は普遍的な言語なのか、といった根源的な問いに最新の音楽科学の研究を通して答えようとしており、将来的な音楽の意義あるいは活用に関して多くの示唆を与えている。最近では脳研究のための技術が発達し、活動中の脳の活動を見ることが可能になった。fMRIやPETにより、神経活動に対応する脳内の血流や血中酸素濃度の変化を計測することを通して、脳と音楽の相互作用を探ることが可能になった。例えば、音楽教育を受けた人々の場合、脳の皮質のいくつかの領域が通常より厚くなっている。ある研究者は、前頭皮質は聴覚野と密接なつながりがあり、音を運動と結びつける際に重要な役割を果たすとしている。また、音楽は脳内で言語や踊りと密接に関係していることも発見されている。著者の関心は、音楽と脳の相互作用についての新たな知識をきっかけとし、音楽と医学の結びつきのみならず、自然世界の音楽、宇宙の音楽、先祖たちの歌等を通して、音楽の根源的な力の探求へと向かっている。（石野健二）

2-4 解題『クラシックの音楽祭がなぜ100万人を集めたのか』



『クラシックの音楽祭がなぜ100万人を集めたのか』

著者名：片桐卓也

出版社：ぴあ株式会社

出版年：2010年

現代人は様々なジャンルの音楽にどこにいても容易に触れることができる。こういった中で、クラシック音楽の需要は一部マニアのものとなりつつあり先細りの感が強い。これは一般的に文化政策、社会的風土、歴史等に起因するのであるが、音楽家そのものにも根本的な原因があるように思う。教養主義の庇護のもと、音楽家は今をいかに生きるかといった極めて基本的な姿勢を忘れてしまっ

ている。歴史的遺産の再現は音楽美の提供という面で極めて効率的であるが、現在の人々に何をどのように伝えるかといった点に切実に向き合っていない。「現代のクラシック音楽の世界というのは、あまりにも定型化されすぎている。そこには革新というものが感じられない。常に革新のない世界はいずれ滅びてしまうだろう。」と、現代の代表的音楽家であるブーレーズは言っている。フランスのナントで革新的な音楽祭を企画したルネ・マルタンはこの言葉に賛同したのである。この日本版が東京国際フォーラム開催されている「ラ・フォル・ジュルネ・オ・ジャポン」であり、今年で10回目を迎え、クラシックの音楽祭であるにもかかわらず延べ538万人の来場者数を集め画期的なものとなっている。そのコンセプトは45分の短いコンサートを同時多発的に複数会場で1日中行い、一流の演奏を低料金で提供し、毎年テーマとなる作曲家を決め、その全貌がわかるように工夫するといったクラシックの演奏会としては破格なものである。(石野健二)

2-5 解題『世界のダンスー民族の踊り、その歴史と文化』



『世界のダンスー民族の踊り、その歴史』

著者名：ジェラルド・ジョナス

訳者名：田中祥子・山口順子

出版社：大修館書店

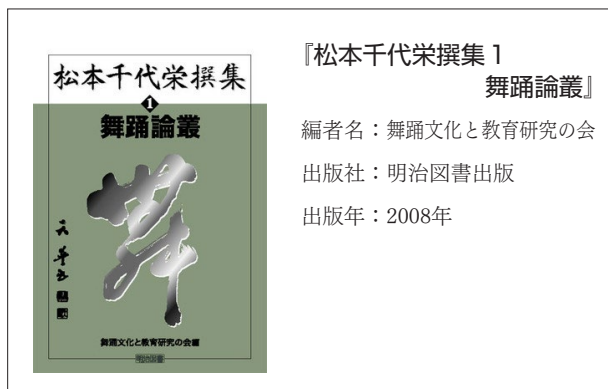
出版年：2000年

著者は、「The New Yorker」（アメリカ合衆国の雑誌）の25年以上にわたる専属ライターと紹介されている。本書は、歴史的、文化的な研究であると同時に、彼自身が実際に現地に赴いて取材した成果によるものである。いま、私たちは、フォークダンスやストリートダンス、バレエなど、多岐にわたった舞踊文化と接している。それらが、どのような意味をもって、各時代や社会、文化の中で生ま

れ、位置づけられてきたのか。これまでダンスに関わる多くの研究書の内容は、ジャンル別であったり、歴史的、地理的に分類されたりと、全容が見えないもどかしさがあった。しかし、本書では、「ダンスは人間の普遍的な活動であるが、すべての文化において必ずしも同じ役割を担っているのではないという点に留意しながら、人間社会でダンスがどのように機能するのかを明らかにすることをめざした」と、序章で綴られているように、歴史や地域を交錯して、ダンスの持つ意味や社会的役割、そこから発展する様式などがわかりやすく解説されている。その機能による分類か

ら、ダンスの力、踊りの神、国家と舞踊、社交の踊り、古典舞踊の舞台、ダンスの新世界、ダンスの近代化、ダンスの国際化の全8章から構成された内容は、それぞれが魅力的なものとなっている。また、全書に掲載されたカラー図版は、それを見ているだけでも愉しく、「ダンスとは何か」の理解を深める入門書となっている。(茅野理子)

2-6 解題『松本千代栄撰集 1 舞踊論叢』



『松本千代栄撰集 1 舞踊論叢』

編者名：舞踊文化と教育研究の会

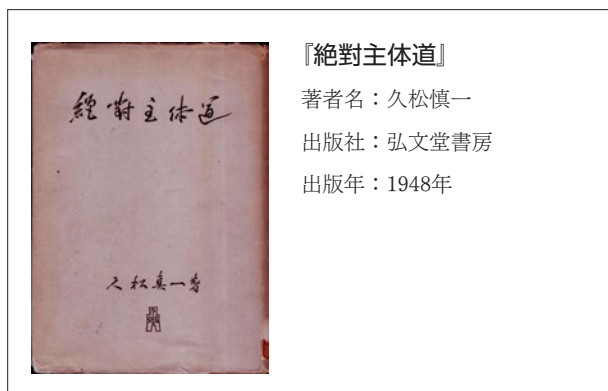
出版社：明治図書出版

出版年：2008年

松本千代栄は、教育の人である。戦後、昭和21年に20代の若さで文部省学校体育指導要綱作成委員の任に就いて以降、我が国の舞踊教育を牽引してきた。半世紀にわたる研究や著作は、常に教育者の立場での発想であり、帰結であった。また、それによって多くの舞踊教育者を輩出した。本書は、松本の舞踊教育学に関する論考や研究成果を全5巻にまとめたシリーズの第1巻であり、「松本

氏が舞踊の原理を内外の文化や芸術に求め、舞踊を教育の現場に還元する研究や実践する様子を紹介し、舞踊文化と教育を繋ぐ思考にせまる」と、解説されている。身体と表現、道を求める、舞踊文化と教育1. 舞踊の原理、舞踊文化と教育2. 文化と教育をつなぐ、でまとめられた本書は、「第5章 お茶の水女子大学での最終講義」の題目である「ひと流れの動きに生命あり」とに舞踊教育の核心を見定めて歩いた年月の足跡であると松本自身がまえがきで記している。本書は、戦後日本の舞踊教育の理論的支柱であると同時に、実践に基づいた舞踊教育史でもある。「創造的芸術経験としての舞踊の特質を問いつつ、体育科のなかに位置づけられた舞踊の存在を、その文化の本質のままに、人間教育に資するものとしようとする思索と努力の日々の論考が収められている」本書から、舞踊教育の原理とその方法、そして、それに携わる教師としての役割など、多くの示唆を得ることができるだろう。(茅野理子)

2-7 解題『絶対主体道』



『絶対主体道』

著者名：久松慎一

出版社：弘文堂書房

出版年：1948年

久松博士は、熱心な浄土真宗の門徒であった農家に生まれ、少年期から僧侶に憧れていた。岐阜中学時代に西田博士を知り、京都帝大を目指すことになった。ちょうど『善の研究』が世に出た頃である。

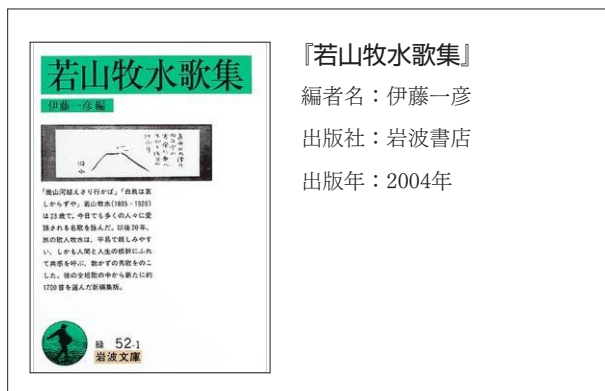
久松博士は、無法・無雑・無位・無心・無底・無礙・無動で成り立つ「東洋無」を起点とし、本書は数少ない日本芸術論の一つ、古典である。

さて、これまでも述べてきたが、書は実用に発した藝術であり、西欧のいう芸術とは異なる。

そして書は、日本独自の藝術思想「藝道」に基づいてこそ「書とはどのような藝術か」を語ることができる。どのような書（もの）も論（こと）も、永い歴史の判定を待つより外にないが、特に書は、任意の私的な師弟関係の中で学ぶことが多い。よって、書は公募展などに出品することで判定を受けることになる。昨今の書の問題を見れば明らかなように、彼らは彼らの書を芸術と主張するが、哲学とは全く無縁の世界にある。

久松博士は、大正8年に京都の臨済宗大学（現花園大学）の教授となり宗教哲学を講じ、龍谷大学教授を経て、昭和10年に京都帝国大学で仏教学を講ずる。かくて私は、私的な師弟関係を持つことなく、公的な大学で真の書教育を続ける。書は哲学である。その根底にあるものは人格美であり、書は人格的象徴性あるものとする。書とその教育が人格を涵養し、本学の学生の資質と能力を十分に発揮させる有用なものとして活用されることを強く望んでいる。（中島 望）

2-8 解題『若山牧水歌集』



筆者の専門である日本語学は、現象としての日本語を分析する学問であり、文学作品の内容を分析・鑑賞する学問ではないという認識がおそらく一般的である。特に学問の縦割りが進んだ現代ではその傾向が顕著であるように感じる。しかし、日本語学のルーツの一つは国学であるが、これは秘伝とされた古今和歌集の和歌の言葉づかいを解明したいという欲求から古語の文法研究へと発展したも

のであるし、もう一つのルーツであるヨーロッパの言語学は詩学と非常に関係が深い。このように、言葉の研究は根源に「うた」を強く志向している。常人では言葉にならない「心」が言語化されたものが「うた」であり、心の有り様をつかむ感性とそれを表現する言葉を持った者が「詩人」である。

若山牧水は筆者にとって畏敬の念を持つ「詩人」の1人である。画家が目にした風景の感動を絵にするならば、牧水は五七五七七の短歌で表す。しかも短歌という形式でなければ感動を表し得なかったのではないかと思わせる歌も多い。例えば有名な、

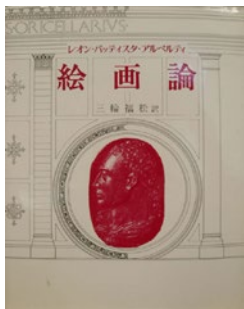
幾山河越えさり行かば寂しさのはてなむ国ぞ今日も旅ゆく

は、牧水が中国山地を旅した時のものだが、あの単調な果てのない山並は、よほど非凡な画家でない限り、絵にすれば凡庸なものになってしまうだろう。

優れた短歌は日本語の精華と言ってよい。日本語を学び研究するためには、日常の言語の観察から芸術レベルの短歌の鑑賞まで、意識して幅広い日本語に触れてほしいと思う。（田和真紀子）

2-9 解題『絵画論』

『絵画論』は1453年にラテン語で書かれたものを三輪福松氏が邦訳したものである。著者のアルベルティ（Leon Battista Alberti, 1404～1472）はイタリアルネサンス期における線遠近法の確立に貢献したとされており、本著にその内容が記されている。



『絵画論』

著者名：レオン・バッティスタ・アルベルティ

訳者名：三輪福松

出版社：中央公論美術出版

出版年：1992年

本著は3巻で構成されている。第1巻では、絵画における基礎知識について触れている。点、線、面という造形要素の解説から始まり、目から対象に向かう光線を視的ピラミッドと定義づけ、このピラミッドの裁断面が絵画であると説いている。線遠近法はこの視的ピラミッドに比例関係の考えかたを組み合わせて導き出している。人間の背の高さの3分の1の長さをブラッチャとして規定し、それ

まで曖昧であった基底面と平行な線の間隔変化を明快にしている。

第2巻では、絵画の構成要素を輪郭、構図、光と色の関係を取り上げ解説している。この中で輪郭を最重要視しており、対象の輪郭を正確に捉えるためのヴェールを用いることを推奨している。ヴェールはデッサンで用いられる網の目が施されたスケールに相当し、前述の裁断面に対応している。

第3巻では、画家の心構えや描画の練習法について取り上げ、ゼウクシスなどの古代ギリシアの画家の事例を取り上げている。当時の画題として最も高い位置付けであった歴史画を描くことを念頭に置き、人物等の対象は実物大に描く、模写の対象として絵画よりも彫刻が優れている、鑑賞者の声に耳を傾けるといった現代の実技指導に繋がる要素も記述されている。(株田昌彦)

2-10 解題『芸術の哲学』



『芸術の哲学』

著者名：渡邊二郎

出版社：筑摩書房

出版年：1998年

＜芸術作品に接し、私たちはなぜ深い感動を覚えるのか＞＜芸術作品が人々に感銘を与える要素とは何か＞。本書は、こうした問いを「哲学的」立場から追究することを目指す。まず、アリストテレスの詩学論から始まり、ニーチェの悲劇論を経て、ハイデッガー、ガダマーの存在論的芸術論が紹介されつつ、著者自身の芸術論が主張される。次に、フロイト、ユングの心理学的、精神分析的立場

からの芸術論が批判的に取り上げられ、芸術作品の創作と享受の動機が考察される。最後に、ショーペンハウアー、カントの芸術論において、再び、存在論的立場からの芸術論が展開される。本書で著者は、人間的主観の心のあり方に美の成立根拠を求める「近代主観主義的美学」ではなく、一貫して「存在論的美学」を主張する。すなわち、芸術作品が目指すのは、美ではなく、私たちの「存在の真実」であり、そこには、主観を超えたいわば「客観的な存在の真実」が輝きでている。そして、その輝き（シャイネン）の結果が「美」（シェーン）である、と捉える立場である。「芸術作品」とは、私たちに自らの「生と世界内存在の真実」を「見えるようにさせる」「生きた鏡」であり、私たちに「自己認識を授け、生きる勇気と喜びを贈り続けるもの」である。本書は、哲学や

芸術学に関する著作としては、比較的読みやすい。また、各々の哲学者の哲学的エッセンスが原書の引用とともに丁寧に解説された上で芸術論が展開されており、哲学入門としても読みごたえのある一冊である。(山田有希子)

2-11 解題『イコノロジー研究 ルネサンス美術における人文主義の諸テーマ(上)(下)』



『イコノロジー研究 ルネサンス美術における人文主義の諸テーマ(上)(下)』

著者名：エルヴィン・パノフスキー

訳者名：浅野徹、阿天坊耀、塚田孝雄、永澤駿、福部信敏

出版社：筑摩書房

出版年：2002年

本書は、E・パノフスキー (Erwin Panofsky, 1892-1968) による「芸術作品の記述と内容解釈の問題」(Zum Problem der Beschreibung und Inhaltdeutung von Werken der Kunst, 1932) の邦訳にあたる。様式論とともに美術史学研究的の軸となるイコノロジー (iconology/図像解釈学) は、ヴァールブルク学派及びパノフスキーによって体系づけられた。本書では、序論でイコノロジーの基本的な考え

方を提起し、上下巻を通じた各章で、ルネサンス期の作品の詳細な読解により、その方法論を明確化している。

イコノロジーは、美術史の補助学としてのイコノグラフィーを基礎としながらも、図像の共通理解から、個人の心理や特定の時代、文化固有の世界観に関する総合的直観へと根拠を広げた学問である。パノフスキーは、作品を見る際の「解釈の三段階」を定義した。ひとつ目は「自然的主題」で、描かれた対象や色彩など、目に見える事物を忠実に読み取る段階である。ふたつ目は「伝習的主题」とされ、この段階では作品が属する文化や時代、宗教観に則した物語や寓意の内容理解を要する。ここまでは、イコノグラフィーと共通するが、イコノロジーでは、さらに、三つ目の段階として作品の奥底にある時代精神や宗教観への感性的、直観的な理解による「内的意味・内容」が考慮される。

本書を通じ、イコノロジーが、作家と作品、時代や文化への精緻な検証を根拠に、作品に隠された正しい意味内容を解き明かそうとするばかりか、鑑賞者の日常的な体験に即した解釈と分析とを少なからず許容することも理解されよう。(本田悟郎)

2-12 解題『造形ワークショップの広がり』



『造形ワークショップの広がり』

編者名：高橋陽一

出版社：武蔵野美術大学出版局

出版年：2011年

近年の造形ワークショップには、「参加」「体験」「主体的な表現」「相互作用と共有」などのキーワードをその基礎的な考え方に挙げることができる。進行役のファシリテーターと参加者が共に能動的に関わり、ファシリテーターと参加者、さらには、参加者間での相互作用から創造的な活動が展開されるのである。ワークショップは、参加体験型のグループ学習であるが、さらに、共同で何かを

つくり出す創造の場としての現代的な意義が付加される。ワークショップとは、知識や技能を活動の過程で高めて行く創造的な体験の活動であると言える。そこでは、「教える—学ぶ」の関係は成り立たず、それぞれの体験や参加者同士の表現の相互作用から活動が創出される。このことは、次の言葉に集約されよう。

「美術にかかわる人々は、制作技術や美的価値観の伝達を中心にした美術教育から新しい方法へと変化していく必要を感じている。それゆえに現在の造形ワークショップへの注目が起きているのだ。」(p.257)

本書では、造形教育の新たな可能性を開くものとして、高橋陽一、三澤一実ら、武蔵野美術大学の教職課程における造形ワークショップの試みや、齋正弘、高橋直裕、降旗千賀子ら、美術館学芸員によるワークショップ、また、社会福祉施設や介護施設でのワークショップ実践などを広く紹介している。具体的な活動を通して、造形ワークショップにおける「美術と社会と人」との関わり、また、その教育的な価値を明らかにするものである。(本田悟郎)

3. あとがき

宇都宮大学は基本的な教育目標として「広く社会に開かれた大学として、質の高い特色ある教育と研究を実践し、人類の福祉の向上と世界の平和に貢献する」を掲げ、教員の教育活動を活性化するため、2004年度に〈ベスト・レクチャー賞〉を設けた。メンバー12名の宇都宮大学芸術教育文献研究会から、次の5名が同賞を受賞した。2008年度第5回に英語科教育の渡辺浩行氏、2011年度第8回に絵画の株田昌彦氏、2014年度第11回に国語科教育の森田香緒里氏と書写の中島望氏、基盤教育・新入生セミナーの筆者の計3名が同時に受賞した。なお、2014年度現在の宇都宮大学4学部教員の在籍総数は336名である。

折しも、2013年4月に国立大学改革プランを設定し、自主的・自律的な改善・発展を促す仕組みの構築として「教員養成分野のミッションの再定義」が求められた。「実践的指導力の育成・強化を図る」ために学校現場で指導経験をもつ大学教員を増やす課題が、重要な柱の一つになった。宇都宮大学教育学部は学校現場経験教員率を2014年度現員率の15%から2021年度に25%にすると目標値を定めた。学校現場経験が反映された教員養成が求められる時代である。

筆者は新入生セミナー(美術)を美術教育専攻の新入生8名のみを対象とせず、本授業の受講を希望する他専攻も含む教員志望意識が高い学部4年生・大学院生4～12名を募って15ヶ年度実施してきた。上級生の最近5ヶ年度の教員採用試験における現役合格率は約70%で、15ヶ年度で卒業後の採用も含め約80名の受講卒業生が教員になっている。

新入生セミナー(美術)の授業開始時に4名前後の班編成を行い、日直班が開始・終了時の号令、開会の歌の輪唱指揮、授業記録ノート記入を行う。教育実習時や教員採用試験で活用できるように、班内では司会・板書・発表・批評を毎回交代して担当する。授業毎に教員が採用後に直面する諸課題を提示することで自分の頭で考えて記述し、学年会に見立てた班で協議し、学級担任・児童生徒・保護者・学年主任などの役割を分担してロールプレイを行い、実感的に相互理解を深める。

諸課題とは、1)初対面の学級や朝礼での挨拶と全員の名前覚えゲーム、2)やる気を引き出す掲示物作成と初保護者会での語り、3)豊かな活動を引き出す多様な係活動とネーミング、4)リーダーの概念と具体的な場面での育て方、5)横浜か鎌倉の遠足先の選択と指導計画、実行統括・しおり作成・整美・保険&保健等の係分担での準備・遠足実施・反省、6)〈いじめ〉や教師を嫌う

子どものとらえと三者面談、7) 学級文集に教師としての素直な自己開示文執筆と語り、8) 美術史や美術教育のレポート執筆と発表・意見交換〔2014年度の8)の4回分は本田悟郎氏担当〕9) 発展的自分らしさ形成の相互確認と残りの大学生活への抱負、10) お楽しみ会の意味と実施等々で「毎回盛り沢山で、90分がすぐに過ぎてしまう」との感想を受講生が伝えてくれた。遠足時には現地ボランティアを若干名依頼し、受講生が初対面の人と心豊かに接する機会としている。素直な自己開示文を読みながら、感情があふれて相互に感涙する姿が毎年度見られる。筆者の専門は美術科教育であるが、40年余の教員経験に基づいて専門外の聴く・話す・書く・読むなど多様な言語活動、歌唱指導・生活指導・学級指導・歴史学習等々を一人の教員として短時間に統合して体现することに努めてきた。美術だけでなく音楽・国語・パフォーマンスなどの芸術の作用を授業に活かしている。本稿に至る「芸術教育文献解題」の諸資料が、よりよい授業づくりに生かされたら幸いである。

『芸術教育文献解題1～4』に至る4年間、記述くださった執筆者から学んだことが大きな力になった。編集担当の本田悟郎氏、執筆者のみなさんに改めて御礼申し上げる。(山口喜雄)

註

- [1] 科学研究費補助金基盤研究A：平成19～22年度：課題番号1203036＋平成23～26年度：課題番号23243078。
- [2] 外務省WEB。
- [3] ウィキペディア：アジア・アフリカの独立年表（1991年はソ連崩壊で一部欧州を含む）。
- [4] 毎日新聞WEB、2014/09/22。
- [5] NHKニュースWEB、2014/09/19。
- [6] 東京新聞WEB、2014/09/12夕刊。
- [7] Robert Watts.
- [8] University of Leeds, Brotherton Library.
- [9] Sir Herbert Edward Read、1893～1968年。
- [10] 本名：ベネディクト／Ben (Benedict) Read, Former Senior Lecturer of History of Art, University of Leeds.
- [11] National Gallery of Victoria.
- [12] Ms Gina Panebianco, Head of Education, NGV.

付記

- (1) 「芸術教育文献解題4」は、研究代表者、山口喜雄の企画・発案による。
- (2) 本論の編集は、本田悟郎が行った。本論の執筆者は、文頭に記載のとおりである。
- (3) 各解題の執筆者名を解題ごと文末に記載した。
- (4) 解題にあたった文献の名称、著者名、出版社、出版年等は、それぞれ文中の図版に添えて記載した。